

シンポジウム

論題 中世哲学と現代

—— 〈神〉なき神——

司会 広島大学 水田 英実

提題：信仰と理性——カンタベリーの
アンセルムスにおける神認識の
構造——

上智大学 K.リーゼンフーバー

提題：神名・差異化・他者・ハーヤー

東京大学 宮本 久雄

提題：〈神〉なき神の探求

龍谷大学 蘭田 坦

(於 北海道大学 2001.11.11)

司 会

水 田 英 実

「中世哲学と現代」と題するシンポジウムは今回で3年連続になる。1年目のサブテーマは「国家と正義」、2年目は「真理と生」、今回は「〈神〉なき神」である。今回このテーマを選んだのは、現代哲学の問題に対して中世哲学は何を答えることができるかという総合テーマのもとで、神の問題それもいわばほとんど共通理解を伴わない仕方で神について考察することが、いまや中世哲学研究に携わるものにとっても、もっとも共通的・もっとも現代的な課題にほかならないと考えてのことであった。テーマを選んだ時点で、貿易センタービルの崩壊・アフガン空爆といった事態を予測していたわけではない。しかし多文化の共生なしに現代世界の危機の克服もまたないとしたら、今回テーマとして掲げたように、〈神〉に対して最大限の自己規制を行いつつ、〈神〉なき神を探求することは如何にすれば可能であるのか、あるいはむしろ何故そのような仕方で神を探求しなければならないのかと問うことは、不可避の作業で

あり、何よりもこのテーマを掲げたこと自体その作業の第一歩にほかならないと思う。

リーゼンフーバー氏は、アンセルムスの神理解の中に、〈神〉なき神の探求を見出そうとしている。信仰の主としての神に対して、ただ理性によってのみ近づこうとしたアンセルムスにとって、人間理性は、考えられうるよりも偉大なもの・最高の善なるものへと向かって自己自身を越えてゆくものであったからである。宮本氏は、トマス・アクィナスの神名論を手掛かりとして、神名によって神的現実を開示しようとする試みの中に、〈神〉なき神とのかかわりを見出そうとしている。氏によればそのとき神的存在は永遠不動の第一実体としてではなく、「絶対的自己同一性の脱自的差異化」という方位をとって理解されることになるという。藪田氏は、〈神〉なき神の探求という提題が含み持つ二重性に着目し、クザヌスの思想を手掛かりとして、神が神として知られていないところでなされる神の探求の問題を取り上げることから始めて、神なき境位においてなされる探求の問題へと進む。その試みは、究極的真理にどこまでも近接するために、憶測を限りなく拡充するいわば水平方向の憶測的認識が、垂直方向に累積されることとして説明される。

三人の提題は、結果としてスコラ哲学の各時代を順に取材して行われ、どの時代にも現代的関心のもとに問題をとらえなおし、理解しなおすことを迫る深い内容を秘めた、神についての思索が行われていたことを示すことになった。三人の提題者の意欲的な試みに対して、会場からも積極的な発言があり、連続シンポジウムの最終回にふさわしい成果として、中世哲学研究の現代的意義を明らかにするとともに、引き続き探求を続けるべき様々の課題の所在をも明らかにすることになった。

提 題

信仰と理性

——カンタベリーのアンセルムスにおける神認識の構造——

クラウス・リーゼンフーバー

一 アンセルムスの問題提起

理性を手立てとして信仰内容を洞察するという目標は、まずは信仰そのものを起源としている。なぜなら、信仰はあるものを、そのものが真理であることそのものにお